書　評

Shannon Bell 著

Reading, Writing, and Rewriting the Prostitute Body

溝　口　　薫

1．はじめに

本書は、カナダのヨーク大学でポストモダン理論を教え、パフォーマーでもある哲学者シャノン・ベルが、古代ギリシアにおける hetaira を今日に復活させようとする、学際的政治的理論プロジェクトである。ヘタイラとは、当時、ソフィストとして政治的に発言もすれば、またエロスの教師でもあった祠堂にいた教養のある売春婦のことをいう。ベルは、現代に至ってもなお、売春婦の身体に常に接続される穢れと病と特殊性は、実は19世紀に構築されたイメージに過ぎないと見る。売春は「血肉を持つ女性の体が、金銭と交換で性的な交渉を持ったからといって、そこになんら本質的な意味はなく、時代が異なれば異なる言説のうちに、異なる意味が付与されてきた」(1－2) と捉えるのである。ベルの観点には、売春の問題に、また、それにかかわる性に人格を問いかける視点はないかのようである。一方、ベルが問題にするのは、政治的主体としての売春婦の視点なのである。

「近代は、他者化のプロセスを通して『売春婦』を他者の他者として生産し、他者の範疇である『女性』のなかの他者としてきた」(2) とベルは指摘する。そのプロセスは、西洋思想の基盤であるロゴス中心主義である形而上学において、男性の優位化と女性の下位化という二分法等を伴ってすでに生じているの

みならず、19世紀の医学、社会科学の言説によって、それはさらに顕著となり、その結果、現代社会においても、また20世紀フェミニズムによってすら、売春婦の身体のディスコースには、他者化が見られるという。ベルは、さもなくば否定的な形で埋もれたままであるそれらを、デリダのディコンストラクション、フーコーの系譜学の方法、またラクラウ、ムフのラディカルデモクラシーを援用しつつ、解体する。本書で「再読」される素材は、プラトンの対話編から、19世紀の科学的言説、さらには、20世紀の理論フェミニスト、あるいは政治的フェミニストの論考であり、さらには、種々の現代の売春婦の言説やパフォーマンスと多岐にわたるが、ベルは、それらのテキストの解体と再読を通して、今日における売春婦たちの政治的、精神的立場を再考しようとする。彼女らの身体に、遠く異教の時代に生きた古代のヘタイラの声や知識を見出し、政治主体としてのポジションを付与しようとするのである。

以下章立てに沿いながら、内容をかいつまんで紹介し、次にその議論の妥当性について検討する。

第二章において、まずベルは、プラトンのテキストから『饗宴』と『メネクセヌス』を取り上げ、Diotima と Aspasia が、西洋思想における最初の女性哲学者にして売春婦 hetairae として、いかに他者化されつつ描かれているのか、その表象を再読し、母なる者、性的な者、精神的な女性の身体として更新する。精神的かつ政治的に強力であろうとするポストモダンの売春婦たちがそうであるように、バーレスク的な価値、そして、他者化されて曖昧となっている女性像のうちに、男性の政治的談話に割り込むヘタイラの再受肉を試みている。もっとも、彼女らと現代の売春婦たちは、同じではない。ベルによれば、なぜなら後者は、「病的な存在としてコード化された他者化のプロセスに対して政治的に対抗的なアイデンティティ、もしくは政治的主体を持った存在として語る」(39) からである。

第三章で、ベルは上記で述べた両者の相違を決定的なものとする原因となった、売春婦をめぐる近代以降の科学的言説を取り上げる。4つ取り上げられているが、その最初のものは、19世紀パリの売春婦たちの文化人類学的研究とも

いえる、医学者 Alexandre Jean Parent-Duchatelet による *De la prostitution dans la Ville de Paris* (1836) である。これは4つのなかでも、その後の19世紀の売春婦をめぐる言説に決定的に影響を及ぼしたとされる。ほかに、William Acton の *Prostitution Considered in Its Moral Social, and Sanitary Aspects in London and Other Large Cities and Garrison Towns* (1857), また売春婦を病的な存在として法的に位置づけることとなった *British Royal Commission on the Contagious Diseases Acts* (1871)、また20世紀初頭の科学的言説としては、Havelock Ellis による二つの著作、ならびに、Freud の二つのエッセイなどを取り上げ、今日のわれわれがよく知る、売春婦のステレオタイプ的イメージの様々が、これらによっていかによく備給され、意識的にも無意識的にも、今日的な我々の売春婦をめぐる認識を構成するに至っているかを明らかにする。またベルはそれらがいかに矛盾を孕んでいるかに注目している。例えば、肉体的にも精神的にも病的である売春婦、社会的な犠牲者である売春婦、労働者階級としての、あるいは、性的逸脱者としての、そして病んだ都市が生んだ破滅としての売春婦、肉体的に異常である身体を有した売春婦、等々であるが、これらのどのイメージも、リスペクタブルな女性を対照させつつ二分法的に定式化されていると述べている。また、同時にそのイメージは、リスペクタブルな女性の痕跡を含むことについても言及し、すなわち彼女は母でもあり、また「ノーマルな」女性と同様の肉体を持ち、だからこそ、また家族のなかへ、妻として回収可能な存在となる点を見逃さない。医学的な観点からは、共通の身体が備わっていることを認める一方で、リスペクタブルな女性との二分法はそのまま残り、かように穢れた女性としての他なる女性としての売春婦という構図は、拡大化されると指摘するのである。

第四章では、4つのフェミニズム理論家、政治家の論考が取り上げられる。Carol Pateman、Catherine MacKinnon、Luce Irigaray、Gayle Rubin である。リベラリズムから性的差異の複層性を認める radical sexual pluralism までその軌道を伸展してゆく様々な立場のフェミニズムの理論は、それぞれ独自の立場から、二分法で女性を他者化する男性中心主義的なヘゲモニーを批判していく

が、ベルによると、そのような理論も、そのなかで、逆に売春婦の身体を再生産してしまっているというのである（97）。例えば、ペイトマンは、そのリベラルな社会契約論的理論のなかで、結婚契約を売春契約の上に特権づけてしまっているとし、またマッキノンは、女性のセクシュアリティをめぐってヘゲモニー闘争を展開するなかで、女性性をめぐる聖と俗の二元性のうち、ネガティブな部分を基盤に据えている点を問題としている。また、女性の多様なセクシュアリティを見失ってしまっているともいう。反対にイリガライは、売春婦が発言するスペースを開いたとしているが、一方で、仕事としての売春、すなわち、市場において働く売春婦に声を与えるとは、男性による女性性の購入ないし交換を承認する矛盾を孕むこととなると指摘する。一方、ラディカルな性の複層的可能性を説くルビンは、売春婦に市場ではない新たな言説上のスペースを開いたものとし、仕事としてではない、性的、政治的アイデンティティとしての売春、性的マイノリティの立場を切り開いたと述べている。

第五章において、ベルは現在の売春婦の言説を取り上げ、如何に売春婦が性的に強力な存在として他者化され、また弱体化されているかを明らかにする。アメリカで顕著な売春婦の権利運動は、新たなアイデンティティを確立しようとしているが、常にネガティブなリアリティが伴う曖昧性のなかでその言説は揺れているとしている。その曖昧さについては、売春婦パフォーマンスアートがそれをもっとも十分に引き出しており、その意味で、この種のパーフォマンス空間が、売春婦の身体を再定義する機会となっているという。６章では、北米で活躍する６人のパーフォ―マンスアーティストの活動を紹介している。

売春とは、本書を通してみてもわかる通り、「西洋においては二十世紀後半に至るまで、議論の領域としてはマージナルな」（1）ものであり、ようやく90年代フェミニズムが取り上げ始めた。この1990年代という時点で、フェミニズム自体の言説にも早速切り込む形で、ポストフェミニズムの立場から、売春を種々の性的傾向を持つ人々の集団の政治的立場を守るという立場に基づき、売春にかかわる人々の観点から、伝統的ヘゲモニーの根深い一面を時代と資料のジャンルを横断的に切り取り、かつ、その主体的政治的立場や精神的アイデン

ティティの可能性を切り開こうとしている。このようなベルのプロジェクトは、たしかに痛快で刺激的な一面を持つ論考であると認めることができるであろう。しかし、一方で、女性の性的エクスタシーを、売春婦という観点からその政治的主体の根拠として求める立場である彼女の立論は、たとえば、古代ギリシアのヘタイラ論にそのまま接合できるのであろうか。

Nirmala Singh（1996）によれば、古代のヘタイラたちを今日の、売春婦パフォーマーたちの間に蘇らせるというベルの観点は「必然的に達成しえない」という。シングによれば、「ポストモダンの主体とは結局、啓蒙時代の超越的主体と対立する」(5) と考える立場のベルが「古代のヘタイラたちを呼び起こして」、断片的なポストモダン的売春婦の主体のモデルにすることの矛盾を指摘するのだ。またシンは「ポストモダン的な間テキスト性概念は、しばしば社会的、政治的、歴史的、文学的『テキスト』を同じようなものとして読ませてしまうのであるが、それは、還元主義と本質主義に陥る危険を冒すことになる」とし、『饗宴』におけるディオティマやアスパシアについてのベルの読みが、その意図とは裏腹に、啓蒙的な主体であるかのように読まれうる点を批判している。彼女らの肉体がより高いエロスへの中継点として働きうるとみなすことは、やはりポストモダン的な売春婦に「超越的でユニバーサルな美や真実」を求めていることにならないかというのである。

また Nina Atwood（2007）は、ベルを、売春婦の身体に関して、より大きな表象メカニズムにおいて、いくつかの点で当を得た批判的洞察を達成している功績を認めたうえで、19世紀を扱ったベルの解説が、その実態としての曖昧さや矛盾に言及しつつも、結局、19世紀の売春婦の身体が、「穢れた身体として医学的、道徳的、法的言説によって」表象されていると結論づけている点を不服としている。この解釈はベルの冒険的事業の狙いのなかでは機能していて、ポストモダンの売春婦の主体性を強調することには役にたってはいるものの、一方で、売春に対する、ヴィクトリア朝の多様な態度にみられるイデオロギー的複雑性を軽視しているというのである。

かように本書は目的達成のために、細部の徹底がないという点で問題を含む

のではあるが、上述したように、古代から現代までという大きな構図のもとに、売春という問題性を含むテーマに真正面から挑み、さらには、ポストフェミニズムの立場からこれをよりポジティブな観点から捉えかえそうとする挑戦は、なんといっても壮大であり、興味深い。また、理論と論理を持って戦う意気込み、議論を進める際のその強引ともいえる突破力に、著者の信念の強さや勇気が感じられるし、ことに、多様な性的マイノリティを守る政治性を、いかなる妥協も排除したところで理をもって展開しようしている点で、学ぶところがあるといえる。あと、イントロダクションにおけるデリダやフーコー等の方法論の説明は、明晰でわかり易く書かれており、これも優れた点として付け加えておく。

引用文献

Atwood, Nina. *The Prostitute Body: Rewriting Prostitution in Victorian Britain*. London: Pickering & Chatto. 2011.

Bell, Shannon. *Reading, Writing and Rewriting the Prostitute Body*. Bloomington: Indiana UP. 1994.

Singh, Nirmala. "Reading, Writing, and Rewriting the Prostitute Body." *Discourse*, Vol 18. No. 3 (Spring 1996). pp. 137-140.

(Bloomington: Indiana UP, 1994)